



発行日 = 2007年2月25日 発行人 = 面出 薫 編集 = 田沼 彩子・矢野 大輔・小川 祐樹
照明探偵団・事務局 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-28-10 ライティングプランナーズ アソシエーツ内 (田沼 彩子)
TEL : 03-5469-1022 FAX : 03-5469-1023 e-mail : office@shomei-tanteidan.org <http://www.shomei-tanteidan.org>

照明探偵団通信

vol.27 Shomei Tanteidan Tsu-shin

国内調査レポート 1
新宿～現代都市の誘蛾灯～
(11/17)

国内調査レポート 2
仙台 SENDAI光のページェント
(12/19-21)

照明探偵団倶楽部活動 1
Transnational Tanteidan Forum 2006
in Singapore @URA Centre
(11/22-23)

照明探偵団街歩き
月明かりの庭 - 横浜・三溪園
(10/6)

照明探偵団倶楽部活動 2
第 33 回研究会サロン @D's Labo
(10/17)



SENDAI光のページェント 定禅寺通

新宿調査 ～現代都市の誘蛾灯～

2006.11.17

田沼 彩子+矢野 大輔+小川 基世

大規模な再開発が進められ、今まさに転換期にある新宿。我々はその現在の姿を明らかにするため、駅出口から見た新宿の姿と歌舞伎町を中心とした靖国通りのファサードの調査を行った。危険な目に合いながら週末の新宿を一日中かけずりまわった団員3人が感じてきたことは…。

■新宿の夜景

駅を挟んだ西側と東側、新宿には2つの顔がある。我々は新宿の全体像を捉えるべく、2つの視点から新宿の夜景を観察した。オフィスの高層ビルが立ち並ぶ西側の夜景は、赤く点滅する航空障害灯と小さな窓のもれ光の集合からなる高層ビル、その前に寝そべる中央公園の闇が印象的。一方、店舗のファサードの光で溢れかえる東側の夜景は、大きく面発光する広告灯やカラーライティングが目をつけた。対照的な両者だが、どちらも「現代都市の誘蛾灯」と呼ぶに相応しい、人が密集する新宿ならではの夜景であった。



オフィスの高層ビル群

■新宿駅

新宿駅の周りでは、現在南口を中心に大規模な再開発が行われており、この影響で新宿駅を取り巻く景観が次々と変化していくことが予想される。そこで、今まさに転換期にある新宿駅主要出口からの景観を調査・記録しようと試みた。南口からの景観は、その大部分を現在進行中の工事が占める。工事現場を縫うようにして通された歩行者用通路には剥き出しの蛍光灯やナトリウムランプが多数設置され、その強烈な光の壁によって周囲の景色はすっかりかき消されてしまっている。

西口はオフィスビルが視界全体を埋め尽くしていると思っていたが、こうして180度見回してみると景観に占めるオフィスビルの割合は意外に少なくこぢんまりとした印象を受けた。

一方の東口は、予想通り商業を中心とした大きなネオン看板で空が埋め尽くされており、その光により駅前広場中央で150xとまるで昼間のような明るさを確保していた



新宿駅東口：広告塔が広場を煌々と照らす



新宿駅西口：高層オフィスビルは意外と少ない



新宿駅南口：5年後に完成予定の南口再開発地域

■ゴールデン街

ゴールデン街は、歌舞伎町と花園神社に挟まれた場所に位置する昔からの飲み屋街である。そこに足を一步踏み入ると、刻々と変化し成長し続ける新宿にありながらまるで時間という言葉を忘れてしまったかのような世界が広がる。建物はもちろん、張り紙、看板、照明、そしてそこを歩く人々までもが、すべて一昔前の空気を漂わせながら空間を支配している。そして、ここにも新宿の顔「袖看板」は存在していた。しかし、靖国通りに多数ぶらさがっている平面的なものとは違い、一軒一軒独立した袖看板が次々とリズムカルに配置されている。この光に誘われて、人々はゴールデン街の奥へ奥へと迷いこんでいくのだろう。この場所もまた現代都市に潜む誘蛾灯のひとつなのだ。



時が経つのを忘れてしまった街・ゴールデン街

■靖国通り

新宿駅東口から歌舞伎町方面へ向かうと、人と車と袖看板で溢れかえる靖国通りにたどり着く。我々は、この日本の繁華街を代表する靖国通りを新宿のメインストリートと位置づけ調査を開始した。昼の靖国通りを歩いてみると、その活気のなさに驚かされる。建ち並ぶ商用ビルはその古さを露にし、毒々しい色の商用看板をただぶら下げているだけである。夜の靖国通りを調査すると、まず路面の照度が170lxと設置されているポール灯の本数の割に高いことに気づく。屋上広告や袖看板から溢れる光が靖国通り全体を煌々と照らし上げているのだ。そして、ふと見回してみると、通り一本挟んだ歌舞伎町側と新宿駅側とでそのファサードに大きな違いがあることがわかる。



活気の感じられない昼の靖国通り



歌舞伎町側は建築全てが人を飲み込む門のよう

歌舞伎町側に建つビルの頭には必ず大きな光を放つ広告灯ののっており、そのどれもが100～300cdの輝度をもって輝いている。もちろん、ビルの頭から足元までびっしりと輝く袖看板をぶら下げて。その一方で、新宿駅側を見ると頭に広告灯ののせているビルも僅かしかなく、窓からのもれ光はあるものの全体的に闇に包まれている印象だ。細い通りに目を移してみても、歌舞伎町の各通りの入り口がそれぞれ個性的な看板や光で彩られておりそれぞれの顔を靖国通りに主張しているのに対し、駅側ではこれといった装飾はされていない。通りを挟んで大きく変わる表情。これはまるで、この歌舞伎町側のファサードすべてが人々を飲み込むひとつの大きな門であるかのようである。



煌々と輝く靖国通り

我々はこの歌舞伎町の門が1日の中でどのような変化を見せていくのか調べるため、ほぼ24時間通して定点観測をおこなった。午後16時、夕日が落ちるときを待ちわびていたかのように徐々に点灯し始めた広告灯は夜の闇の広がりと共に活気を増していき、22時の観測で点灯がピークに達した。やがて終電の時間になるとポツポツと消灯しはじめ、新宿駅側の広告灯はほぼ消灯。しかし、歌舞伎町側の広告灯は夜はこれからだと言わんばかりに消灯する気配すら見せなかった。午前3時の観測では歌舞伎町側もようやく消灯しはじめるが、客引きはまだ街中にあふれ危険な空気を漂わせている。そして午前6時、朝日が新宿の街を照らすころ歌舞伎町はようやく静けさを取り戻すが、結局日が昇るまで広告灯の20%程度は点灯していた。



13:30 毒々しい看板が目につく

22:00 点灯がピークに達した

05:55 夜明けまで点灯し続ける看板

06:30 日の出を迎える靖国通り

この歌舞伎町に輝く門は、今後大きな時間の流れの中でどのような変貌をとげていくのだろうか。

本当に眠らない街、新宿歌舞伎町。我々は朝にその街を離れ、ようやく深い眠りにつくことができたのだ。

(矢野大輔、小川基世)

仙台調査 SENDAI 光のページェント

2006.12.19-21

村岡 桃子+矢野 大輔

■ SENDAI 光のページェント

仙台駅前から西方向にのびる青葉通と、その北側に平行にのびる定禅寺通で開催される“SENDAI 光のページェント”。地元の商店街の方々が街の活性化のために始め、地道な募金活動をしながら皆でイベントを盛り上げ、大事に育てていった結果、今年でイベントは21年目を迎え規模も東北一といわれるまでになった。

ライトアップされるケヤキの本数は221本。使用される電球は約70万球。一本あたりおよそ3000球設置される計算である。「冬になると落葉し、寒々しい風景を呈するケヤキ並木に電球をつけて街に賑わいを。」という、地元の商店街の方々のアイデアで始まったイルミネーションだそうである。

調査前に下調べを重ねるなかで、仙台市民が誇る冬の一大イベントだということが手に取るようにわかるものの、そのデザインコンセプトにたどり着くことが出来ず、光のイベントとしての実態はどのようなものなのだろうか？という若干の不安を抱いて仙台に向かった。

今年で21回目を数える“SENDAI 光のページェント”は、仙台市民の発案から始まり大事に育てられてきた東北地区最大規模のイルミネーションです。地域の人々と密接に関わりのあるイルミネーションの調査を主軸に据え、仙台ならではの街の光を探しに照明探偵団は真冬の仙台へ向かいました。



せんだいメディアテークとページェント



どこまでも続く消失点の見えない光のトンネルに息を飲んだ

仙台に到着したのはお昼頃。薄曇りの中、光のページェント開催地の屋間の調査に向かった。そこで目にしたのは、布製テープや麻の縄のようなものでケヤキの幹にぐるぐる巻きにされた電源ボックスやスピーカー、無数の電球が枝枝に絡みつくように取付けられた姿であり、その光の取り付け方の配慮の乏しさに我々は肩を落とした。

しかし、日没後に再びページェント開催地へと戻った我々を迎えたのは、想像を遥かに越えた圧倒的な光の集積であった。定禅寺通りの中央のペDESTリアンは、どこまでも続く消失点の見えない光のトンネルとなり、しばらく瞬きさえも忘れてしまう光景に我々は息を飲んだ。無数の光に囲まれほぼ無影状態のペDESTリアンは、幻想的な雰囲気をつたえており、周りの人々の歓声と相俟って一体は高揚感で満ち満ちていた。

毎正時には、1分前から一斉にイルミネーションが消灯する「スターライトウイーク」が行われる。消灯している間、人々は足を止め、いまかいまかと点灯する瞬間を待つ。これまでざわついていた通りは突然静まりかえり、車の音が響く。そしてついに点灯の瞬間を迎え、人々の笑顔と歓声が静寂を破る。これほどシンプルなオペレーションが通りを行く人々に強い一体感をもたらすことを、その瞬間を味わうまで我々は想像することも出来なかった。屋間目にした光の設置方法への落胆を心の片隅に置きつつ、我々は光のページェント内を心行くまで回遊し楽しんだ。

ページェントの一環として、定禅寺通の南端に位置する勾当台公園では公園内のライトアップが行われていた。広い面積に対して手作りの照明器具が点在する演出で、ライトアップながら寂しい印象であった。また、勾当台公園の向かいにはシンボルツリーと呼ばれる4本の木を1つの大きな木に見



勾当台公園のイルミネーション



ページェント来場者に手を振るサンタ

立ててライトアップしたものがあつた。これは青と緑の電球に紫の帯が巻き付きながら、常に白のフラッシュが行われているというもの。照明デザインを生業とする我々にとっては閉口せざるを得ない代物とも言うべき光のツリーであつたが、これからデザインされる可能性が残された光のページのシンボルツリーとしてポジティブに今は受け止めてみることにした。改善の余地は多々あるが、定禅寺通りを光で満たしたページの光の量を体験した時の高揚感は、それらを霞ませてしまうくらい強烈なものであつた。市民の力でここまで脈々と光のイベントが繋がれてきたそのこと自体にも大きな意味と価値があると思う。ケヤキ並木や環境に配慮をし、地元の材料や産業とイベントを結びつけ、よりオリジナリティを持たせることができれば、光のイベントとしてさらに意味のあるものになるのではないだろうか。市民主体で運営しているイベントとあつて、財政的に厳しい年もあると聞く。これからも仙台の人々に支えられて、大事に育てられていくと嬉しいと願うばかりである。



ホテルのパーよりページェントを見下ろす



アエル：中央には仙台の特徴であるアーケードの屋根が光る



タワービル：西方向を見る。無個性な光だ



SS30ビル：北方向を見る。これといった建物は見えない



青葉城：東方向を見る。光のエッジが街のスケールを物語る

■仙台の街並みと光

ページェントの調査の合間に、仙台市内の3ヶ所と青葉城から高所撮影を行った。都内の夜景では、なかなか夜景が途切れるエッジを見つけることは難しいが、仙台の夜景はくっきりとしたエッジを持ち、街のスケールを光で物語っていた。

市内からの高所撮影で特に目に付いたのが、仙台駅西側のメインストリートを縦横に覆うアーケードである。アーケードは乳白のドーム状の屋根を持ち、内部の光を受けて光量も色温度も不均一にぼんやりと夜景に浮かび上がっていた。それらが仙台市内で観察できた一番特徴的な光であると考えた我々は、大きなアーケードのうちの5つ（サンモール一番町、ブランドーム一番街、マーブルロード、ハピナ、クリスロード）の調査に向かった。

調査を通して一番驚いたのは、どれひとつとして同じ照明器具、照明の配置を用いたアーケードがないことであつた。半屋外空間として、統一してデザインや管理をしやすい空間なのではないかと安易に思っていたが、それぞれの区域ごとにまったく別な意匠や手法が用いられていた。アーケードを覆うドームへのアッパーライトは、密な間隔で設置されているにもかかわらず点灯されていなかった。クリスマス直前の期間ということもあり、アーケード内も電飾がかなり吊られていたが、華やかさには欠けており、ページェントと並んでまだまだデザインされる余地があることを考えさせられる光環境であつた。

(村岡 桃子、矢野 大輔)



おびただしい数の照明器具

仙台に数多く存在するアーケード